

小学校

平成 7 年 度

教育研究員研究報告書

音 楽

東京都教育委員会

平成7年度

音楽教育研究員名簿

地区	学校名	氏名
江東	北砂小	北野雅子
大田	赤松小	秋元みさ子
世田谷	武蔵丘小	□ 小黒美知子
中野	谷戸小	杉本博美
豊島	池袋第一小	△ 後藤百合
荒川	第九峡田小	川谷内美佐枝
練馬	豊玉小	酒井原美保
足立	入谷小	坂上善子
葛飾	末広小	□ 吉野真
江戸川	清新第一小	◎ 古山和子
武蔵野	第一小	土肥久美子
昭島	拝島第二小	渡辺直実
日野	平山小	千秋香
武蔵村山	第十小	有賀三輪子

◎世話人 □副世話人 △記録

担当指導主事 今 直 樹 教育庁指導部初等教育指導課

目 次

I 研究主題	2
1 研究の背景	2
(1) 児童の実態	2
(2) 目指す児童像	3
2 研究主題設定の理由	3
3 研究仮説	4
4 研究の全体構想図	5
II 研究の内容	6
1 「聴く」活動のとらえ方	6
2 「聴く」活動の場面	7
3 教師の支援	9
4 授業改善 《指導事例》	10
(1) 第1学年 「いろいろなおとをみつけよう」	10
(2) 第2学年 「リズムにのって楽しくうたおう」	12
(3) 第3学年 「ふしの流れを感じて表現しよう」	14
(4) 第4学年 「リコーダーでアンサンブルの工夫をしよう」	16
(5) 第4学年 「感じたことから自分のめあてを見つけてきこう」	18
(6) 第5学年 「ぼくらのおはやしをつくろう」	20
(7) 第6学年 「ハーモニーする気持ちよさを味わおう」	22
III 研究のまとめと今後の課題	24

< 概 要 >

主体的・創造的に音楽活動するためには、音楽によさを感じ、児童が、音楽活動に対する思いや願いをもてるようにすることが大切であろうとの仮説を基に研究を進めた。

指導事例では、音楽をよく「聴く」という音楽科における基本的な活動を、児童が意識的に行うことで学習のめあてが明確になり、より一層主体的に音楽活動を進められるよう指導方法を追究し、授業改善の方途を探った。

I 研究主題

音楽によさを感じ、自分の思いや願いをもって音楽活動する児童を育てる指導の工夫
——— 児童が意識的に「聴く」活動を通して ———

1 研究の背景

世の中には様々なジャンルの音楽がある。その中で、音楽科で扱う音楽は、児童にどのような影響を与えているのだろうか。めまぐるしい社会の変化に主体的に対応し、心の豊かさや文化への関心を大切にして生きる児童を育成したい。そのためには、音楽のよさにふれ、生涯にわたり様々なジャンルの音楽を愛好していける心情や、豊かな感性を育てることが、音楽科にとっての課題と考える。

児童が音楽活動を通して音楽の美しさやよさを感じ、豊かな心情を自らに培うことは、自己教育力や豊かな自己実現を目指すことにもつながるのではないかと考える。音楽が生涯にわたって児童の心の友となっていくことを願いたい。そこで、まず児童の実態をしっかりと把握し、目指す児童像を明確にすることにした。

(1) 児童の実態

各研究員の所属校の児童について、日常の会話や授業中の活動の様子などから、次のようなことが特徴的なこととして挙げられた。

① 「音楽科の授業」が好きな児童は多い。

児童が比較的苦手意識をもつ、歌う・楽器を演奏する・創作をするなどの活動においては、多少いやだなと思うことはあっても、音楽そのものが嫌いという児童は少ない。

② 自分から積極的に活動しようとするのが少ない。

- ・教師の指示を待つことが多く、活動が受身であることが多い。
- ・表現することにはずかしさを感じ、自信が持てない。
- ・家庭や社会生活の中で、人に言われて行動することが多いせいか、自らの意志で行動しようとするのに慣れていない。

③ 大きな声を出したり、楽器の音を出したりすることで音楽の学習をしていると思ってしまう児童もいる。

④ 集団で活動する楽しさは感じている児童が多い。

みんなと一緒にできる合唱・合奏・つくって表現するなどの活動は楽しいと感じている。

⑤ 表現することは比較的好きだが、じっくりと演奏や音楽を聴くことは苦手な児童が多い。それは、なぜ聴くのかという自分自身の音楽への思いや願いが、はっきりしていないからではないだろうか。

(2) 目指す児童像

上記①～⑤の実態を基に、目指す児童像について考えてみた。

- ①は、児童が好きな分野の活動というのは興味・関心の有無というよりは、表現技能・技術の力の差が大きく影響しているように思われる。したがって、技術偏重にならないよう配慮しながらも、基礎・基本の学習の大切さを痛感した。
- ②③は、音楽の中に何かよさを見だし、それによって自分なりの思いが生まれれば、音楽への願いも生まれ、積極的に音楽活動ができるのではないか。また、教師が用意する教材や本時の目標だけではなく、児童が自分の思いや願いをもつことで、目標が明確になり、意欲的・積極的に活動できるのではないかと考えた。
- ④は、音楽科教育の最大の利点ともいえる。児童が集団の中の一員として音楽活動する楽しさや成就感がもてること。また、音楽活動の中でのルールを通して、人間関係やマナーを、大切にすることを知る機会でもある。
- ⑤については、児童に「聴く」ということをもっと意識してほしいとの願いから、音楽の基本は「聴く」ことにあると考え、サブテーマにも掲げた。そして、目指す児童像を下記のように設定した。

目指す児童像

- ・音楽のもつよさに心を動かされ、自ら課題や目標を求めようとする児童
- ・より美しいものや、自分の思いや願いに向かって、積極的に活動しようとする児童
- ・自信を持って生き生きと音楽活動を楽しめる児童

2 研究主題設定の理由

日常の授業の中で、児童一人一人が満足感や成就感をもって音楽活動するためには、教師の指示を待つという受身の学習を改善していくことが重要である。そのためには、児童が音楽に「よさ」を見だし、その表現や鑑賞という音楽活動を主体的に展開し、自分なりに音楽への思いや願いをもつことが大切ではないかと考える。「音楽のよさ」とは主観的なものだが、人間の精神状態に様々な影響や作用を与えていると思われる。

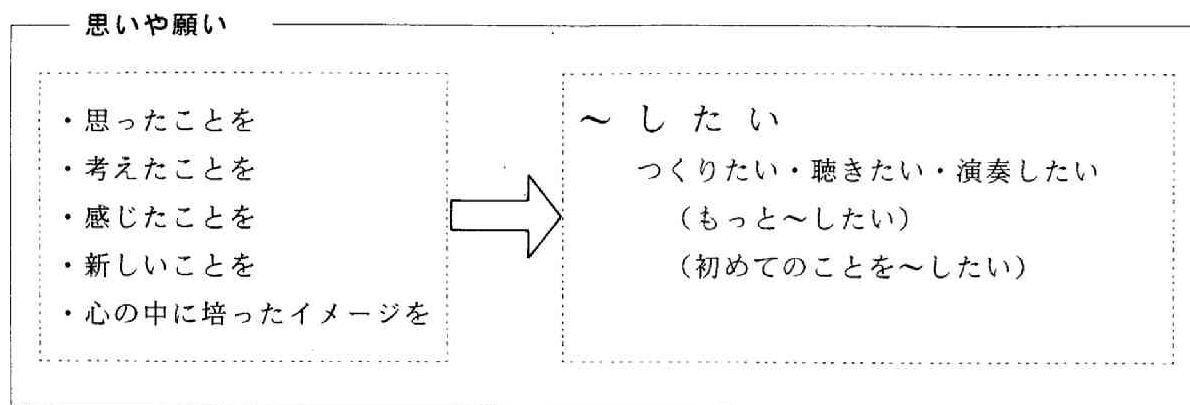
音楽科において、児童が活動を通して得られる「よさ」には次のようなものが考えられる。

音楽のよさ

- ・音楽活動することの心地よい充実感や成就感
- ・一体感（音楽と自分・自分と仲間・音楽と仲間）や感動体験の共有
- ・もっと違う感動をもちたいという興味関心の広がり
- ・言葉では表せない感動体験や感性の高まり

感じたことを言葉や文章で表現することに慣れていない児童にとって、どのような些細な気付きや感動でも、自分なりに音楽によさを見つけ、自分なりの思いや願いをもつことでこれからの音楽活動が、積極的・創造的になり充実してくると思われる。つまり、児童の音楽への要求・欲求・願望を的確に理解・把握することが大切である。

そこで、具体的に児童の「思いや願い」をどのようにとらえたらよいかを考えた。



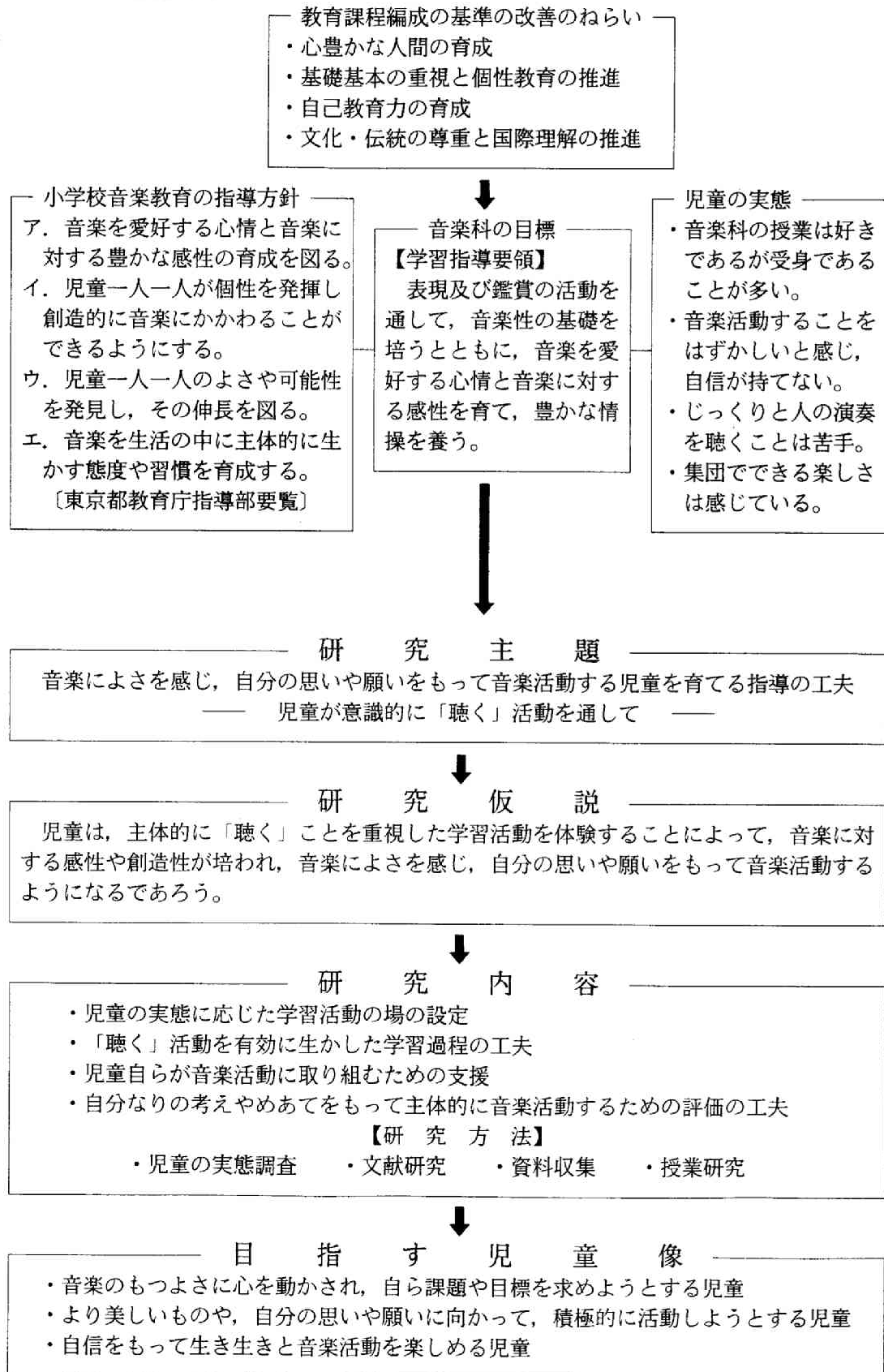
児童が音楽によさを感じ、「思いや願い」をもつための支援について考えてみた。まずは「聴く」こと、それもよく耳を澄まして全身で音楽を受け止めること。それによって児童は音楽のイメージをとらえ、自分なりの思いや願いをもつことができるようになるのではないかと考えた。しかし、これまでの学習を振り返ると、それをどの程度意識して学習してきたかが明確ではない。すなわち、教師がめあてを示し、それに従って児童の学習が展開されることが多かった。また、音楽は、興味・技能・技術・感受性などの面で、個人差の大きい教科であるということもあり、教師の示すめあてが、児童の能力や興味関心と一致するとは限らなかった。

児童一人一人が思いや願いをもち、積極的に音楽活動を楽しみ、音楽の美しさを感じていくには、「耳を澄まして聴こうね」「〇〇に気を付けて聴こうね」など、支援することで児童に「聴く」という活動を意識させることが大切である。児童は意識的によく聴くことで、自分なりの思いや願いが明確になり、より高い目標をめざし積極的・自発的に活動することで音楽経験も広がり、知性と感性との調和がとれた人格形成を目指していけるのではないかと考える。

3 研究仮説

児童は、主体的に「聴く」ことを重視した学習活動を体験することによって、音楽に対する感性や創造性が培われ、音楽によさを感じ、自分の思いや願いをもって音楽活動をするようになるであろう。

4 研究の全体構想図



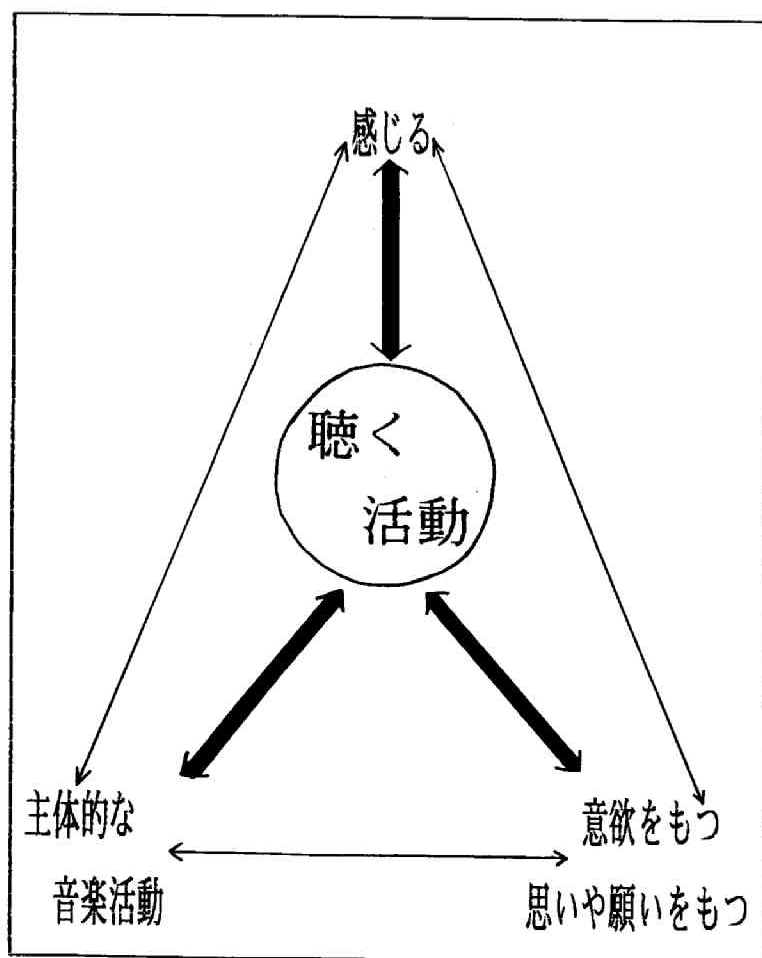
Ⅱ 研究の内容

1 「聴く」活動のとらえ方

音楽の授業で毎時間必ず行う活動は、「聴く」活動である。範唱や範奏を聴く・友達の演奏を聴く・自分の声や演奏を聴く・合唱や合奏で合わせようとして聴く・CDやテープを聴くなど、すべての音楽活動は音や音楽を「聴く」活動を通して行われると言える。

日常子供たちは、たえず外から音や音楽で刺激されている。普段の生活において、あらゆる音があふれているにもかかわらず、一つ一つを気にしないで過ごせるのは、無意識のうちに聞き流しているからであろう。そこで、「聴く」ということを、「聞こえている」状態ではなく「聴こう」とすること、つまり音や音楽に向けて意識を集中させて、聴き取ること・感じ取ることととらえ、児童が「聴く」活動を通して自分なりのめあてをもち、主体的に音楽活動ができるような支援のあり方を以下のように考えた。

〔支援の構造〕



音や音楽に期待感をもちながら、意識を集中させて「聴く」活動から、自分なりの音楽への思いや願いが生まれる。

それは、音や音楽のよさ・美しさを感じ取り、自ら音楽活動したいという、表現することへの意欲へと移り変わって行く。

また、自分の表現した音楽や友達の表現した音楽を聴き合ったり、聴き比べたりする活動を通して、相違点や共通点が発見できるようになり、更に深く音楽を感じ取って、よりよい音楽活動ができるようになる。

この一連の流れは、相互に関連し合い繰り返されることで一層深まり、より主体的な音楽活動へと発展していくと考えられる。

2 「聴く」活動の場面

児童が、自分の思いや願いを工夫して表現するには、音楽を聴いて感じ取り、さらに表現したものを認め合い、高め合う能力を育てることが大切である。そこで、「聴く」活動の場面を次のようにとらえ、各場面における内容や育てたい児童像を、以下のように表した。

場 面	内 容	育 て た い 児 童 像
聴き取る	<ul style="list-style-type: none"> ・ 範唱や範奏を聴き、これから学習しようとする楽曲全体の流れを感じ取る。 ・ 楽曲を特徴付けている要素や構成、表現媒体の特徴など、めあてをもって聴く。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p style="text-align: center;"><めあての例></p> <p>発声・発音・響き・音色 速度・強弱・曲の山 フレージング・バランス 曲想の工夫・演奏の形態 楽器選定の工夫など</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・ すぐれた演奏に触れることによりあこがれが生まれ、より美しい表現にしようとする。 ・ 楽曲全体に触れることにより、音楽の美しさを感じ取って聴こうとする。 ・ 課題をもって学習しようとする。
聴き分ける	<ul style="list-style-type: none"> ・ 音色や音量のバランス、楽器の特徴や表現形態の違いに気付く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 楽曲に適した表現に気付き、自分の力で音楽をつくりだそうとする。
聴き合う	<ul style="list-style-type: none"> ・ グループで練習したり、発表したりし合う。 ・ 互いの歌声や、楽器の音のバランスを、確かめ合う。 ・ 今までの練習の経過や成果を相互に認め合う。 ・ より優れた表現をめざし、高め合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ お互いのよさを認め合い、より優れた表現を求めようとする。 ・ 友達のよさを、自分の演奏に生かそうとする。

聴き比べる	<ul style="list-style-type: none"> ・同一曲を違う演奏者の演奏で聴く。 ・同一曲を違う演奏形態で聴く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・比較聴取をすることで、自発的に学習しようとする意欲がわき、感性が高まる。
聴き、吟味する	<ul style="list-style-type: none"> ・より美しい音や、より豊かな曲想表現をめざして、音楽を何度も注意深く聴く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の出す音を注意深く聴きながら、練習を繰り返そうとするようになる。 ・聴いて感じたことを、自分の音を通して確かめようとする。
聴き、味わう	<ul style="list-style-type: none"> ・演奏をじっくりと聴く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・美しい表現に対する関心を高め、より豊かな表現をしようとする。
聴き、広める 聴き、深める	<ul style="list-style-type: none"> ・同一曲を違う演奏形態で聴く。 ・同一作曲者の違う作品を聴く。 ・同じジャンルの演奏を聴く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな演奏形態で聴いたり、違う作品を聴いたり、同じジャンルの演奏を聴いたりすることで、音楽体験が広まり、深まるようになる。



3 教師の支援

(1) 児童の実態に応じた学習活動の場の設定

①学習の場を整える

- ・音響環境を整備し、よりよい条件で音や音楽を鑑賞できるようにする。
- ・学習内容に応じ、掲示物や視聴覚機器などを有効に活用する。
- ・児童一人一人が安心して自分の思いや願いを表現できるように、温かい人間関係をつくる。

②活動の流れを工夫する

- ・学習内容と児童の実態に応じ、座席や楽器の位置に配慮するなど、学習形態を工夫する。
- ・予想される児童の反応を分析し、思いや願いに応じた柔軟な学習過程の改善をする。

(2) 「聴く」活動を有効に生かした学習過程の工夫

①指導計画に、「聴く」活動を意図的に位置付ける。

②児童が、「何を」「どのように」など課題意識をもって聴くことができるよう、学習内容に応じて「聴く」活動場面を効果的に設定する。

(3) 児童自らが音楽活動に取り組むための支援

①音楽活動を通して、児童の思いや願いが表現でき、より豊かなものにするよう個に応じた助言をする。

②「聴く」活動を通してつかんだ課題と学習のねらいが適合するよう、学習活動に助言をする。

(4) 自分なりの考えやめあてをもって主体的に音楽活動をするための評価の工夫

①「聴く」活動の場面を取り入れた学習カードや、個に応じた数種類の学習カードを作成し、活用する。

②思いや願いを引き出す自己評価と相互評価の活動場面を設定し、「聴く」活動に結びつける。

③一人一人のよさを認め、自分の思いや願いを大切に、意欲的に聴いたり表現したりするよう「ここがすばらしい。」「こうするともっとよい。」など、適切な助言をする。

かにむかし 学習カード

なまえ ()

1・2・③・4の場面

時	めあて	気がついたこと・わかったこと	フィク
1 9/20	グループづくり 場面づくり	グループで話し合いをちゃんとできた	(絵)
2 9/22	音さがし 場面づくり	いろいろな道具(ハートボトルなど)も使って音を出した	(絵)
3 10/27	音づくり 1	みんなで協力して音づくりができた	(絵)
4 9/3	音づくり 2	私は手作りカスターでほちの音をたすことができた	(絵)
5 10/9	音づくり 3	リズムをみんなであわせてよくできた	(絵)
6 10/18	中間発表をしよう	グループと音がかさばらないようにほかのグループからアドバイスがまた	(絵)
7 10/20	音や音楽を工夫しよう	ほかのグループに言われたことを直してやってみた	(絵)
8 10/25	発表会をしよう	楽しく発表できたほかのグループをよすた	(絵)

学習カードの一例

4 授業改善－指導事例

(1) 第1学年

①題材 「いろいろなおとをみつけよう」

②題材の目標

- ア. 楽器のいろいろな音色に気付き，楽しく演奏するようにする。
- イ. イメージにふさわしい音色を，工夫して表現するようにする。

③学習の内容

- ア. 奏法の違いで，楽器の音色が変わることに気付き，基本的な奏法を身に付ける。
- イ. いろいろな音色に関心を持ち，音づくりを楽しむ。
- ウ. イメージにふさわしい音色を，工夫して表現する。

④教材

- ア. 「おもちゃのシンフォニー」第1楽章
レオポルド・モーツァルト作曲
- イ. 「タンブリンのわ」
山上 武夫作詞 岩河 三郎作曲
- ウ. 「音のマーチ」
東 龍男作詞 山本 直純作曲



⑤題材の指導計画 (8時間扱い)

次	ねらい	時	学習活動 (☆「聴く」活動 ◇評価)
一	○楽器のいろいろな音色に気付き，音あそびをする。	1	☆「おもちゃのシンフォニー」を聴き味わう。(使われているおもちゃの楽器の音色に気を付けて聴き分ける)
		2	・「タンブリンのわ」を歌う。 ☆タンブリンでいろいろな音を探し，それぞれの音を聴き分ける。
		3	◇タンブリンのいろいろな奏法を身に付けようとしている。 ・自分で見つけた音を加えて楽しく歌う。

二	○楽器でいろいろな音を探し奏法を工夫する。	4	☆「音のマーチ」の範唱を聴き取る。 ・気が付いたことを発表する。
		5	◇大きな音, かわいい音, 不思議な音の違いに気付いている。 ・楽器で, いろいろな音を探す。
		6	☆奏法を変えていろいろな音を聴き分ける。 ◇いろいろな音を探し, 表現を工夫している。 ・自分たちで見つけた音を発表する。 ☆友達の発表を聴き合い, よいところを認め合う。 ◇友達の発表のよい点を見つけ, 自分の活動に生かそうとしている。
三	○曲想にあった音色を工夫して表現する。	7	・自分たちのつくった音を加えて「音のマーチ」を歌う。
		8	◇曲想に合った音色を工夫して表現しようとしている。 ☆友達の演奏を聴き合い, よいところを認め合う。

〔考察〕

いろいろな音を探す活動を通して、奏法が一つだけではないこと、いろいろな音がつくれることを知り、興味がわき、意欲的に活動していた。今までに学習した奏法だけでなく、違う奏法の音も、その楽器の音だということに気が付き、表現の幅を広げることができた。また、友達の発表を聴き合ううちに、音を重ねることで生まれる美しさやおもしろさに気付いた。大きすぎる音に対しての「あまりきれいな音じゃない」という友達からの声に耳を傾け、美しい音を出すように気を付けて演奏する児童も出てきた。

この活動を通して、自分や友達の出した音や歌を意識して「聴く」ようになり、「鍵盤ハーモニカも吹き方を変えればきれいな音になるかな」「この歌は、どならないでもっときれいな声で歌いたい」などのつぶやきが出るようになった。

1年生の児童は、体全体を動かしてリズムを取ったり、元気に歌ったり、表現したりすることを楽しむが、それに満足して、より美しい音で演奏しようという意識はあまりない。しかし、意識して「聴く」活動をすることによって、美しい音をつくり出したいという意欲が高まるのではないかと考える。

このような授業を通して、音に対して興味・関心が増し、生涯音楽への芽生えにつながるものと思う。

(2) 第2学年

①題材 「リズムに合わせて楽しくうたおう」



②題材の目標

- ア. 身体表現を工夫して歌う楽しさを味わうようにする。
- イ. 拍の流れを感じ取って表現するようにする。

③学習の内容

- ア. 曲の感じや歌詞に合った身体表現を工夫する。
- イ. 拍の流れを感じ取って、表現する。
- ウ. 自分なりの思いや願いをもって身体表現の工夫をする。
- エ. 友達の発表をよく聴いてよさに気づき、自分の表現に生かす。

④教材

- ア. 「このくつはけば」 東 龍男作詞 山本 直純作曲 ヘ長調 2分の2拍子
- イ. 「タンブリンのわ」 山上 武夫作詞 岩河 三郎作曲 ハ長調 4分の4拍子
- ウ. 「くつやさん」 デンマーク民謡 ヘ長調 4分の4拍子
- エ. 「大きなくりの木の下で」 作詞・作曲者不明
- オ. 「むすんでひらいて」 フランス曲 ハ長調 4分の4拍子

⑤題材の指導計画 (8時間扱い)

次	時	ね ら い	学習活動 (☆「聴く」活動)	◇ 評 価
第 一 次	1	○拍の流れにのって聴唱するようにする。	☆「タンブリンのわ」の範唱を聴く ・「タンブリンのわ」を歌う。	◇よく聴いて、拍の流れにのって歌っている。
	2	○♪と♪を組み合わせ、リズム伴奏をしながら歌うことを楽しむ。	☆タンブリンでリズム伴奏を工夫し、それを聴いて吟味する。 ・「大きなくりの木の下で」を身体表現しながら楽しく歌う。	◇タンブリンの奏法を知り、♪と♪でリズム伴奏をしようとしている。 ◇拍の流れやフレーズを感じ取って身体表現をしようとしている。
	3	○身体表現をしながら歌うこと	☆「タンブリンのわ」の歌詞やリズムから、身体表現を工夫して歌い	◇タンブリンでリズム伴奏を入れたり、身体表

		に関心をもつ。	聴き合う。 ・「くつやさん」, 「むすんでひらいて」を身体表現しながら歌う。	現をしたりしながら歌っている。
第 二 次	4	○拍を感じ取って歌うようにする。	☆「このくつはけば」の範唱を聴く ・「このくつはけば」をリズムにのって楽しく歌う。	◇2拍子を感じ取って歌っている。
	5	○イメージに合った表現を工夫する。	・自分の履きたい“くつ”を絵に描き、履いた時の気持ちと動き方を工夫して身体表現する。 ☆友達の発表を聴き合う。	◇自分の思いや願いをもって表現しようとしている。 ◇友達の工夫した点や、よさを見付けようとして聴いている。
第 三 次	6	○グループごとに、身体表現を工夫する。	・“動物のくつ”を想定し、グループごとに選択して身体表現を工夫する。(動物……大きい, 小さい, 速い, 遅い)	◇協力して工夫している。 ◇テンポ, 強弱等に気を付けている。
	7	○身体表現の工夫した点やよさに気付こうとして聴く。	☆グループごとに工夫した身体表現を発表し、聴き合う。	◇友達の発表をよく聴き工夫した点や、よさに気付いている。
	8	○身体表現を模倣することで、いろいろな拍の流れに気付いて歌う。	・グループごとに工夫した身体表現を、模倣しながら歌う。(順番に先生役になって、模倣し合う。)	◇友達の工夫のよさに気付き、身体表現をしながら歌うことを楽しんでいる。 ◇拍の流れを感じ取って歌っている。

〔考察〕

本事例では、簡単に身体表現をしながら歌える歌も何曲か取り上げ、曲の感じや歌詞に合った身体表現をして歌う楽しさを感じ取れるようにした。「このくつはけば」という曲は、初めて聴いた児童が自然と笑顔になるような明るくリズムカルな曲である。そこで、まずこの曲のよさに気付き、自分なりに履きたい“くつ”を考え、グループ活動を通して身体表現をする活動を行った。発表時には、どこを工夫したのか「聴く」観点を考えて聴き合ったため、児童一人一人の音楽表現が一層豊かになったと思われる。

(3) 第3学年

①題材 「ふしの流れを感じて表現しよう」

②題材の目標

- ア. 友達の表現のよさを自分の表現に生かし、喜びをもって音楽活動するようにする。
- イ. 拍の流れやフレーズを感じ取って表現するようにする。

③学習の内容

- ア. 音楽を聴いて感じ取ったことから、自分なりの考えをもつようにする。
- イ. 歌詞の表す情景を想像して、楽曲に対するイメージをふくらませる。
- ウ. 曲想に合った歌い方を工夫し、表現することの楽しさを味わう。

④教材

- ア. 「メヌエット」ト長調 ベートーベン作曲
- イ. あの雲のように 芙龍 明子作詞／外国曲 ト長調 4分の3拍子
- ウ. ふじ山 文部省唱歌 ハ長調 4分の4拍子

⑤題材の指導計画 (7時間扱い)

次	第1次	第2次	第3次
ね ら い	○主なふしの変化 や反復を感じ取 って鑑賞する。	○歌詞の表す情景を想像して歌ったり、 リコーダーで演奏したりするよう にする。	○フレーズを感じ取っ て、歌い方を工夫す るようにする。
時	1	2 3 4 (本時) 5	6 7
教 材	「メヌエット」 ト長調「あの雲のように」.....「ふじ山」.....	
主 な 学 習 活 動 ◇ 評 価	○主な旋律の変化 や反復に気を付 けて聴く。 ◇主な旋律の変化 や反復に気付き 自分なりの考え をもって、聴い ている。	○歌詞の表す情景を想像して歌ったり グループで、曲想に合った歌い方を 聴き合い、工夫する。 ○拍の流れを感じて、なめらかに演奏 する。 ◇拍の流れやフレーズを感じ取り、表 現の仕方を工夫している。 ◇友達の歌い方や演奏の工夫に気付き、 自分の表現に生かしている。	○ふじ山の写真を見たり、歌詞の表す情景 を想像し、歌い方を 工夫する。 ○工夫した歌い方を、 味わって聴く。 ◇曲想を感じ取って、 歌い方を工夫してい る。

⑥本時の指導（第2次・第4時）

- ア. 本時のねらい 友達の工夫した歌い方を聴いて、自分の表現に生かしている。
 イ. 本時の展開

学習活動（学習形態）	☆「聴く」活動	※支援 ◇評価
今月の歌を歌う。（一斉） 「赤鬼と青鬼のタンゴ」	☆お互いの声を聴き合う。	※緊張をほぐし、学習の気分をつくる。
発表の練習をする。（班） 「あの雲のように」	☆発表の練習をし、聴き吟味する。	※地声で歌っていないか、各班に助言する。
工夫した歌い方で発表する。（班） 「あの雲のように」 ・他の班の歌い方を聴いて、よいところや、もう少し工夫するところ等について話し合う。 ・出された意見をもとにして、他の歌い方を試したりして、さらによりよい表現を目指す。	☆曲の気持ちにあった歌い方かどうか聴き分ける。 ☆他の班の歌い方と、自分たちの歌い方を聴き比べる。 ☆友達の演奏を聴き味わう。	◇曲想を感じ取って、歌い方を工夫しているか。 ※発表の時、友達が失敗しても、笑ったり冷やかしたりしないように、申し合わせる。 ◇友達の工夫したところに気付き、自分の表現の中に生かしているか。
学習カードに記入する。（個人） ・友達の発表を聴いて、思ったことや気付いたことを書く。		※書けない児童がいたら、個別に助言する。

あの雲のように

〔考察〕

本題材では、児童が音楽を聴いて感じ取ったことから、自分なりの考えをもって表現するようになることを目指した。「自分ならこうしたい」「友達のよいところを真似しよう」と考えることで、児童は、音楽をより身近に、自分のものとしてとらえるようになった。これは、音や音楽に意識を集中して「聴く」活動を多く経験してきた成果であろう。この経験をもとに、児童が自らめあてを見つけ、活動するように、支援していきたい。

30

じぶんだったらこんなふうに歌いたいな...

高い声で「すずかに速く歌いたい。」



友だちの発表をきいて...

さいよは速く歌いたいと思っただけ
ど今は「かくり」歌ってみたい
です。

(4) 第4学年

①題材 「リコーダーでアンサンブルの工夫をしよう」

②題材の目標

- ア. 互いの音をよく聴き合いながら、アンサンブルの工夫をする。
- イ. 互いの表現のよさを認め合い、自分の表現に生かそうとする。
- ウ. 音の重なりや響きの美しさを感じ取るようにする。

③教材 「メロディーバイキング No.2」 小山 茂 作曲

④学習の内容

- ア. 4つのふしを組み合わせでアンサンブルの工夫をする。
- イ. 友達のよいところを見つけ、自分の表現に生かす。
- ウ. 音の重なりや響きの美しさを感じ取る。

⑤題材の指導計画（6時間扱い）

次	ね ら い	時	学 習 活 動 (☆「聴く」活動)
第 一 次	・曲の感じをつかむ。	1	☆4つのふしの範奏を聴き取る。
		2	・4つのふしを階名唱する。 ・リコーダーで演奏する。 ・音楽朝会での「パッヘルベルのカノン」を思い出し自分なりのイメージをもつ。
第 二 次	・音の重なりや響きなどをよく聴き合い、グループごとに協力してアンサンブルの工夫をする。	3	・グループをつくる。 ・自分たちの希望・技量などを考慮し、誰がどの旋律を受け持つかを相談する。
		4	☆音の重なりや響きなど、互いの音をよく聴き合い、吟味しながら、4つのふしの組み合わせや演奏順序などを工夫する。 ・工夫したことをカードに記入する。
第 三 次	・互いのよさを認め合い自分の表現に生かそうとする。	5	・グループごとに発表する。 ☆他のグループの演奏と自分たちの演奏を聴き比べ、友達のよいところを見つける。 ・カードに記入する。

	6	<p>・他のグループの演奏のよいところを取り入れ、さらに工夫をし、発表する。</p> <p>☆他のグループの演奏を聴き比べ、聴き、味わう。</p>
--	---	---

〔考察〕

グループ活動でのアンサンブルの工夫をすることによって、グループの友達の演奏や、他のグループの演奏を注意深く「聴く」活動を、意図的に行うようにした。今までなんとなく聴いていた友達の演奏のリズム・速度・音の長さ・音色などを意識して聴くことができるように、発問をできるだけ具体的に行ったり、学習カードを利用したりした。児童は、少しずつではあるが、「自分たちの演奏とここがちがう。」「友達のここがいい。」「自分たちだったらこ



ともたちの発表をきいて

(Xロダ-君)グループとても組みあわせがよくて音がきれいだった。

(じんぞう)グループできない人にあわせてゆるくりやっていた。

(ほてな)グループさいごに全員がういた所がいいなと思いました。

(Xロダ-君)グループ音がとてもきれいだった。

発表をして思ったこと

ドキドキしたけどおもしろかった。

こんどやるときはさん

のグループのようにみんながやらないで音を大きくしたり小さくしたりしたい。

う演奏したい。」など、いろいろのを感じ、考えるようになってきた。

また、グループ活動の時には音楽室だけでなく音楽準備室、余裕教室などを利用した。自分たちの音や活動にだけ集中できるので、互いの演奏や、思いや願いの違いに気付くことができた。そして、互いの音を聴き合っては、話し合い、また音に出して確かめるなど何度も繰り返し工夫し直すようになり、自分たちのグ

ループの思いや願いにそった演奏に近づくことができるようになった。

この学習で児童はこれまで以上に満足感や、成就感などを体験することができ、次の学習への意欲につながった。

(5) 第4学年

①題材 「感じたことから自分のめあてを見つけよう」
—— 「ノルウェー舞曲」第2番 イ長調 ——

②題材の目標

- ア. 曲想の変化や楽器の音色を感じ取り、自分のめあてをもって聴くようにする。
- イ. 感じ取ったことを生かして表現の工夫をするようにする。

③学習の内容

- ア. 曲全体の気分を感じ取る。
- イ. 曲想の変化から、曲の構成に気付く。
- ウ. 感じ取ったことから、聴くめあてをもつ。
- エ. 曲想や楽器の音色を感じ取る。
- オ. 感じ取ったことを生かして表現する。



⑤題材の指導計画 (4時間扱い)

次	ね ら い	時	学 習 活 動 (☆「聴く活動」)
一	○曲想の変化や楽器の音色を感じ取り、自分のめあてをもって聴く。	1	☆「ノルウェー舞曲」を聴き、感じたことや気付いたことなどを書きとめ、発表する。
		2	☆自分の感想を確かめたり、友だちの感想を参考にして聴いたり、さらに気付いたりしたことを発表し合う。 ・感じ取ったことから、曲の構成、主な楽器などについてまとめる。
		3	☆感じ取ったことやこれまで学習したことの中から、聴くめあてをもつて聴き、味わう。 ☆他の形態の演奏と聴き比べる。
	○感じ取ったことを生かして表現の工夫をする。	4	・感じ取ったことやこれまで学習したことを生かして、同じ形式の既習曲の曲想を工夫して演奏する。

〔考察〕

本事例では、「ノルウェー舞曲第2番」の鑑賞の学習を通して、児童が注意深く「聴く」ことを意識し、自分なりの課題（めあて）をもって聴き、音楽を味わうことをねらいとした。

これまでの鑑賞の学習では、教師が用意しためあてに従って聴いた経験が多く、児童一人一人が、自分なりのめあてをもって聴く活動は少なかった。

児童が、自分なりのめあてをもって「聴く」活動を経験した結果、以下のような変容がみられた。

- ・他の児童から出された多様な感想から、児童は、はっきりと自分なりの「聴くめあて」をもつことができた。
- ・曲想の違いや楽器の音色について学習し、音楽を聴き深めていく過程において、児童が自分なりの具体的な「聴くめあて」をもつことで、音楽をより身近なものとして感じ取れたことが学習カードや鑑賞している様子からうかがえた。
- ・感じ取ったことを音で確かめるために既習曲の演奏をしたが、助言する前に児童から曲想に関する発言がたくさん聞かれた。
- ・同じ曲を形態の異なる演奏で聴くと、楽器の音色の違いだけでなく間の取り方や強弱、速さの微妙な違いまで聴き取ることができた。「もっと聴きたい」という児童の感想も聞かれ、「聴く」ことへの興味・関心が高まったことは学習の成果と言える。
- ・感じ取ったことを学習カードに記入したり発表したりする際に、自分の思いを適切に表現できない児童も見られた。そのような児童の評価と支援の方法を、学習カードの活用も含めて今後の課題として考えていきたい。

これらの活動の他に、毎回の授業の始めに「今月の曲」として、3分程度の音楽を鑑賞している。音楽のジャンルは特に決めずに、全ての音楽の中から選ぶようにしている。この時間は、児童が自然に音楽の学習の中に溶けこめるような雰囲気づくりをねらいとしている。発達段階に応じて多少の説明も加えているが、自由な気持ちで「聴く」場として捉えている。

以上のような活動を通して、児童が音楽に対する集中力を養い、より豊かな感性をもてるような支援を今後も心がけたい。

音楽鑑賞ノート

4年「組」名前「」

曲名	ノルウェー舞曲第2番 傅編	作曲家	グリーグ (ノルウェー)
【はじめで聞いた曲想】 感じたこと・わかったこと・ふしぎに思ったこと 音が静かだった時は、楽しそうにいろんな人が遊んでいて、音が大きくなると何かがおこったような感じがした。始めは、華やかな音でとどろいて、途中で短調最後は長調にもなるというのがよかったです。			
【自分のめあて】 AからBに、BからAに変わるところをよく聞き取る。場面分けをわかっていく。			



【さいごの感想】 Aの時はどてりの方がなめらかだった。Bの所もどてりの方がはかばかだった。オーケストラでは、オーボエをふいている人は体を動かしてきれいにふいていた。AからBにあがる時は、少し間をおいていたのできれいだと思えた。オーボエもどてりも、両方とも消えるように終わっている曲だと思った。
【先生から】 AとBの移り変わりをとてもよく聞いてね。終わりに少し注意してきけたのは素晴らしいことです。



(6) 第5学年

①題材 「ぼくらのおはやしをつくろう」

②題材の目標

- ア. おはやしや楽しさを味わいながら、日本の伝統的な音楽や楽器に関心をもつようにする。
- イ. 自分なりの感じ方を生かして、音の重なりや全体の構成を工夫し、日本の伝統的な音楽によるふしやリズムを表現するようにする。

③学習の内容

- ア. おはやしや和太鼓の演奏を鑑賞して、その楽器の音色、日本の音階やリズムの特徴、演奏全体の雰囲気を感じ取る。
- イ. 和太鼓の基本的な奏法を身に付け、楽しく演奏する。
- ウ. 日本の伝統的な音階を使って旋律をつくる。
- エ. 楽器の構成や曲全体の構成を工夫しながら音楽をつくる。

④教材及び資料

- ア. 「管弦楽のための木挽歌」《第2の部分》 小山 清茂作曲
- イ. 「和太鼓クラブの演奏」 《映像資料》
- ウ. 「おはやし」 川崎 祥悦作曲

⑤題材の指導計画 (9時間扱い)

次	時	ね ら い	学 習 活 動 (☆「聴く」活動)	◇ 評 価
第 一 次	1	おはやしや和太鼓の演奏の楽しさや特徴を感じ取るようにする。	☆「木挽歌」や和太鼓クラブの演奏を視聴しながら、おはやしや和太鼓の音楽の特徴を感じ取る。	◇おはやしや和太鼓の音楽の特徴を感じ取ろうとしている。
	2		・和太鼓の基本的な奏法を覚える。	◇和太鼓の基本的な奏法を身に付けようとしている。
	3		・タイヤなどを使って練習する。	
	4 (本時)		☆おはよしの旋律を聴き取り、リコーダーで演奏する。 ・階名唱をして、日本の伝統的な音階を使った旋律の特徴をつかむ。 ☆リコーダーと太鼓で、互いに聴き合いながら合奏する。	◇おはよしの演奏の特徴を聴き取って演奏しようとしている。 ◇互いに聴き合って演奏しようとしている。

第 二 次	5	日本の音階によるふしをつくったり，太鼓によるリズム伴奏をつくったりするようにする。	・リズム模倣やリズムリレーをする。	◇リズム伴奏をつくろうとしている。
	6		・和太鼓のリズムを即興的につくる。	
	7		・グループに分かれておはやしづくりをする。	
	8		☆自分のつくるふしやリズムを注意深く聴きながら，より豊かな曲想表現をめざし，練習を繰り返す。 ☆発表して互いに聴き比べる。	
第 三 次	9	進んで表現したり，聴き合ったりする喜びを味わうようにする。	・おはやしにふさわしい曲想をいろいろと工夫して表現する。 ☆グループごとに発表し，互いに聴き味わう。	◇おはやしの雰囲気合った表現をしようとしている。 ◇他のグループのよいところや，工夫したところを聴き取ろうとしている。

〔考察〕

和太鼓をたたくことへの興味関心から意欲を引き出し，グループでおはやしのリズムやふしを考え，自分たちのおはやしをつくるようにした。それによって多くの児童が和太鼓に興味をもち，教師や友達の助言を注意深く聴く態度が見られた。特に，音楽に積極的でない男子の数人が意欲をみせ，活気のある授業になった。その結果，自信をもって太鼓をたたけるようになり，ふしに合ったリズムづくりに積極的に取り組んだ。また，いろいろなリズムを即興的に合わせたり，和太鼓の特徴をいかしたリズムをつくれるようになってきた。

ふしづくりは，最初は，日本的なおはやしのふしにならない曲が多かったため，太鼓のリズム伴奏とあうように，第1次で学習した「おはやし」のふしやリズムを例にしながら，手直したものを聴き合い，意見を交換し，さらに，手直したものを十分に聴き合って，自分なりのふしを完成していった。

この学習を通して，児童は，「聴く」ことが，音楽の活動の基になること，また，自己評価や相互評価を参考にして，自分たちのおはやしづくりの活動を，より楽しく豊かなものにしていくためには，注意深く音楽を何度も聴いたり，互いに聴き合った感じ方を取り入れてふしづくりをしたりすることが大切であることを実感した。

(7) 第6学年

①題材 「ハーモニーする気持ちよさを味わおう」

②題材の目標

- ア. 友だちと合唱したり、合奏したりすることを楽しむ。
- イ. 音の重なりや和音のひびきを感じて、表現の工夫をする。

③学習の内容

- ア. 音の重なりに関心を持ち、和音のひびきを感じ取る。
- イ. 和音に合ったふしづくりや場面にあった表現を工夫する。

④教材

- ア. 「歌よ ありがとう」 3部合唱 花岡 恵作詞 橋本 祥路作曲
- イ. 「リボンのおどり」 合唱奏 メキシコ民謡 橋本 祥路編曲
- ウ. 「リボンのおどり」 鑑賞 メキシコ民謡
- 「ラ・バンバ」 鑑賞 ペレス・プラード楽団
- 「ラ・バンバ」 鑑賞 トリオロス・パンチョス
- 「ラ・バンバ」 鑑賞 ケニー・ギャレット (ジャズ・ラテン)

⑤題材の指導計画 (8時間扱い)

次	ねらい	時	学 習 活 動 (☆は「聴く」活動)
第 一 次	○音の重なり気付 き、曲のよさを感じ取る。	1	☆「歌よありがとう」の範唱を聴き、味わう。 ・気付いたこと、気に入ったところ、気持ちがよかったところなどを発表する。
		2	・自分で歌いたいパートを選ぶ。 ・三部合唱の部分をへ長調の階名で歌う。 ☆他の声部を意識して聴きながら歌詞で歌う。
第 二 次	○使われている和音 を知り、音楽の仕 組みや曲の特徴に 気付く。	3	・「リボンのおどり」の合唱部分を階名視唱する。 ・使われている和音(I, IV, V)を調べる。 ☆鍵盤ハーモニカで演奏し、和音のひびきを感じ取る。 ☆和音あてクイズをする。(継続)
		4	・「リボンのおどり」の合奏部分を視奏する。 ☆「リボンのおどり」の範奏を聴き取る。
第 三	○音の重なりを感じ ながら、場面に合 った表現を工夫す る。	5 6	・グループで場面や様子に合った「リボンのおどり」の合奏を工夫する。(①朝・まつりへ行こう。②リボンがからまった。③踊り過ぎてフラフラ。④夕方・家に帰ろう。) ・和音にあったふしをつくり、楽器や音の重ね方や曲の構成を工夫する。

次	7	☆3種類の「ラ・バンバ」を聴き比べ、表現の工夫に生かす。
	8	☆音の重なりや工夫したところに注意しながらグループの演奏を聴き、吟味する。 ・友達の見解を参考に再考する。 ・クラス全員で「リボンのおどり物語」の表現を工夫し、まとめる。

〔考察〕

①導入の工夫としての「聴く」活動

「心をこめた歌い方がいい」「アルトとソプラノがハモッていてきれい」「最後のラララ・のところが聴いていて気持ちがよかった」「言葉がいい」。これらは、「歌よありがとう」の範唱を初めて聴いた児童の感想である。何も言わなくても、音楽を聴いただけで、児童は曲のよさを感じ取る力を持っている。半数の児童は2部（3部）合唱の部分に着目し「きれい」「気に入った」「気持ちがいい」と答えた。この導入の「聴く」活動で、ハーモニーの美しさに気づき、曲へのあこがれと関心をもったことで、児童は、最後まで本題材に意欲をもち、音楽活動に取り組むことができた。

②創造的な音楽活動をする時のヒントとなった「聴く」活動

「打楽器だけの部分を間に入れると変化がつくね」「クラベスの音がいい」「歌が入っている」「交互に演奏している」などのように、児童は、「リボンのおどり」の範奏と3種類の「ラ・バンバ」の演奏を聴いて、速さ、使われている楽器、音の重ね方、曲の構成に関心をもった。その一人一人の感じたことがグループの演奏の工夫に取り入れられていった。

③グループ発表・自己評価としての「聴く」活動

友達の演奏を聴いて（適時・中間発表）、よかったことはピンクの短冊、もっとこうしたらいいなと思ったことは黄色の短冊に書き、全員に見えるようにボードに貼った。演奏したグループは、それを参考に、次の自分のめあて「みんなとは合っていたと思ったが、もっときんをもっと強くした方がいいらしい」「今度は歌も入れよう」などと青の短冊に書いて、その下に貼ったところ、一人一人の思いや願いが明確になり、グループの中の一人だけの意見で活動が進められることなく、一人一人が生かされた活動になった。

④ My House ヘレツゴー



3曲同時に聞いて和音が れているから、作曲した曲も よく考えたんだと思えた	本物のメロディをもっと 大きい音でやるといい (目立つように)	リズムをまゆくりしたり するのを、もうまゆくり する。
---	---------------------------------------	-----------------------------------

Ⅲ 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

この研究は、普段から何気なく聴いている音や音楽を意識的に意図的に聴く活動を重ねることによって、音や音楽によさを感じ、自分なりの思いや願いをもち主体的に表現することができる児童になってほしいという願いから進められた。

そのために、どのようにしたら児童の思いや願いが主体的、創造的な音楽活動につながるか、教師の支援や評価はどのように工夫すべきか、児童が目的をもって「聴く」ことが定着するためのめあてのもち方はどのようにするか、などを視点に研究をしてきた。

その結果、以下のようなことを成果として得ることができた。

- (1) 学習活動の中で「聴くめあて」を明確にすることや課題意識をもつことによって、児童は音や音楽を聴き合ったり聴き分けたりすることができるようになった。その結果、よりよい音楽活動をめざそうとする思いや願いが生まれ、意欲的に活動できた。
- (2) 学習環境の整備、視聴覚機器の活用など、学習活動の場の設定を工夫したり、教師が共感的な理解や温かな雰囲気づくりをしたりすることによって、児童は楽しみながら学習を進めることができた。このことによって児童は自信をもって活動するようになった。
- (3) 学習過程に応じた「聴き方」を工夫し、効果的な個人評価や相互評価を取り入れることにより、よさを認め、さらにそれを自分の活動に生かそうとする学習が展開された。
- (4) 学習形態を工夫し、グループ活動を取り入れることによって、イメージを広げたり協力したりしながら活動を工夫する学習態度が育った。
- (5) 指導計画に、音や音楽を聴く観点を明確に位置付けることによって、児童は具体的なめあてをもつことができるようになった。
- (6) 学習カードを活用することで、児童一人一人の学習状況・学習過程が把握しやすくなり、柔軟な対応が可能となった。
- (7) 教師は、児童の興味や関心を引き出し、自信をもって音楽活動ができるように評価や支援を工夫するようになった。

2 今後の課題

- (1) 児童が自分なりの思いや願いをより豊かに自己実現できるために、音楽科の基礎・基本の充実を図る。そのための系統的な指導方法の検討・改善を行う。
- (2) 児童一人一人の思いや願いを生かすために、複数の教諭によるチームティーチングを行う。

意識的・意図的に聴く活動が、音楽科だけではなく、他の教科・領域でも児童に定着し、日常化されれば、思考力や判断力はより高まり自ら課題を見つけることができるようになるであろう。このような学習活動を継続することによって、児童の自主性や主体性が育ち、自己教育力の育成につながると考える。